

## 石だん

春、運動会で負けた。その日からぐほう寺の石だんを毎日のぼった。  
すごく高い石だんの上から、に王ぞうがにらんでる。ぼくはくやしかった。  
「いつか見てる」と、たたかった。

梅雨、あじさいにかこまれた石だんをのぼった。歯をくいしばった。  
に王ぞうは、まだにらんでた。しかし見下ろすと木がキラキラしてきれい  
だった。ぼくは、もつとがんばってもつといけしきを見たいと思った。

夏、セミが鳴く石だんをのぼった。あせが目にしみた。  
に王ぞうは、もうにらんではなかった。たまにやさしい顔をした。まるで、  
ぼくをおうえんしてくれてるように見えた。に王ぞうのきたいにこたえたい  
と思った。

来年の運動会はかてる。だって石だんを毎日のぼったから。  
ぼくのくやしなみだはなみだ石にあずけよう。に王ぞうに「かってきた  
よ。」と言えた時、ぼくの生まれた町ごと、キラキラしてるはず。

